

多文化共生社会構築のための一方策

「分かってもらえる日本語」の提案

—増加する外国人研修生を背景に—

天野貴介

要旨

近年、生活者として来日する外国人数の増加が著しい。本稿は日本語を母語とする日本人と、来日する外国人との交流の方策について言及するものである。具体的には、外国人研修制度に注目する。同制度を用いて来日する外国人研修生の日本語学習環境、さらに工場等の生産現場を観察し、そこに眠る言語環境の問題を報告する。意思疎通を実現するためには、研修生自身の日本語学習は欠かせない。しかし、本稿では日本人側の日本語運用にも調整の工夫を提案する。これまでの研究では、日本語能力試験3級程度の外国人を対象にしたものは確認されるが、来日する研修生はその能力が4級にも満たない場合が殆どである。外国人研修生にも理解できる日本語の発話形態を模索する必要がある、本稿では「分かってもらえる日本語」としてその必要性を両者の利益に直結する取り組みとして提案している。

キーワード：外国人研修生 共生言語 日本人発話 日本語教師発話
分かってもらえる日本語

1. はじめに

外国人登録者数は増加の一途をたどり、日本に生活する外国籍者は208万人を超えた（法務省入国管理局資料 2007）。これは、日本の総人口の1.63パーセントにあたり、今後も更なる増加が予想される。確かに、街中においても外国人を見かけることは既に珍しいことではなくなり、先の統計は我々の生活の中でもその変容が実感されるであろう。

日本語を母語とする日本人と、生活者として来日する外国人とがこの地において共生するためには、両者の意思疎通を実現する言語が必要である。公共交通機関などでは複数言語での表示が一般的にはなったが、使用されている言語は限られたものである。また、日常の会話場面では

日本語が圧倒的に多く用いられている。増加する外国人との共生社会を構築するうえで、受け入れ側である日本が今後どのような言語政策を展開するか注目していきたい。一方で、「日本語ができた方が生活者として有利である」という現実が今の日本にはある。しかしながら、全ての外国人が生活に十分な日本語を身につけている訳ではない。西口(2007)によると「いわゆる在日の人たち約 50 万人と日本語がよくできると見られる留学生約 10 万人を除いたおよそ 130 万人」がそれに該当し、かれらの多くが日本語学習に時間とお金を割く余裕がないことを指摘している。日本語母語話者と「十分な日本語を身につけていない」来日外国人とが、より効率よく意思疎通を図るための方策を提案したい。

1.1 研究目的

非日本語母語話者との交流における母語話者側にできる発話工夫を考える。具体的には、近年増加が著しい外国人研修生の接触場面に注目し、かれらに理解されやすい日本語の発話形態を探る。

2. 先行研究

2.1 岡崎敏雄(1994)の提唱する「日本語の国際化」

岡崎(1994)は「日本語の国際化」を唱えた。岡崎のいう「日本語の国際化」とは、「国内で母語話者によって用いられてきた日本語が海外で非母語話者によっても用いられるようになっていく過程」と「日本国内のコミュニティを共同で構成する日本人と外国人との間で日本語が用いられるようになっていく過程」の二つを指している。岡崎は、様々な母語背景を持つ外国人が特定の言語の中に共生することを「言語内共生」と表しており、後者の「日本語の国際化」は日本語の「言語内共生」のことであるといえる。一方で、あるコミュニティにおいて複数の言語が共生関係をもって存続していくことについては「言語間共生」としている。そして、日本語の言語内共生を実現するために、日本人と外国人が双方のやり取りを通して共生言語としての日本語を育てていくことの必要性を説いている。岡崎は共生言語としての日本語は日本人側から一方的に要求するものではなく、双方のインターアクションの中から共に作り上げるものであると考えている。

2.2 岡崎眸(2001)の提唱する「共生言語としての日本語」

今日の日本国内の日本語学習者数の変動が外国人登録者数の増加に

見合うものではないことを指摘し、日本語学習の機会を持たない外国人が増加している現状を報告している(2001)。また、少子高齢化が進む日本において、現実的な問題解決の方策としては将来的に外国人労働者を受け入れる以外にないと岡崎は考えている。しかしながら、外国人労働者の受け入れは、単に「人間」が入国するだけではなく、そこには「異文化」が伴うことを指摘し、つまりは日本の「多文化・多民族社会化」を強く予測している。「多文化・多民族社会化」は両者に「権益」の放棄が要求されることから双方にストレスが生じるが、「一つの社会に複数の言語や文化が存在することを肯定的に受け止める意識」が不可欠であると岡崎は考えている。また、多民族社会で「非母語話者同士あるいは母語話者と非母語話者を媒介する言語」については「共生言語」と表現している。もし、日本における共生言語として「日本語」が選択されるならば、母語話者である日本人はその「日本語」に寛容な態度で臨まなければならない、むしろ、「共生言語としての日本語」は母語話者同士の「日本語」とは区別し、「共有部分のある異なる言語」と認識すべきと考えている。よって、「共生日本語」は「日本語母語話者においても学習の対象」となる言語であり、それは両者のコミュニケーション活動の中で創出され、また習得されるものとしている。

2.3 佐藤和之(1999ab)の「やさしい日本語」

佐藤は 1995 年に起こった阪神淡路大震災を契機に、日本在住の外国人が災害時に「二重被災」していることに注目した。災害時に流される救援情報等は日本語によるものばかりで、日本に生活する外国人が地震等の一次的な被害に加え、的確な情報を得られないという二次的被害に陥りやすい存在であることを指摘している。そこで、佐藤は外国人に分かりやすい日本語として「やさしい日本語」を提唱した(1999a)。「やさしい日本語」は日本語能力試験 3 級レベルの表現を用いて運用を試みるという具体的な提案である。更にその有効性は、佐藤(1999b)(2006)の 2 度の検証作業により実証されている。

3. 外国人研修制度

3.1 外国人研修制度の概要

外国人研修制度は開発途上国への技術移転(協力活動)を目的とした制度であり、約 40 年の歴史がある。しかしながら、1990 年以降はその在りようが大きく変化した。少子高齢化が進む中、国内における産業規

模を維持するための苦肉の策として、同制度を労働力確保の手段に置き換える動きが加速した。具体的には、従来であれば研修生の受け入れが不可能であった中小企業であっても、組合等の受け入れ団体で一括監理をすることを条件に、制度の利用が認められるようになったのである。これを契機に来日する研修生の数は飛躍的に増加することとなる。入国管理局統計によると、2000年の新規入国者数は36,199人であったが、2006年のそれは70,519人に増加している(入国管理局2008)。

同制度では、最初の1年間は「研修生」として活動することとなる。この期間の活動はあくまで「研修」であり、労働とは認められない。よって、最低賃金法は適応されず、事前に決められた「生活手当て」の支給と住居施設の提供のみが受けられる。またこの間の残業は一切認められない。2年目以降は「研修生」から「技能実習生」に呼び名が変わる。両者の最も大きな違いは「技能実習生」は法的に労働者であり、最低賃金法の適用はもとより、残業まで全て可能となり「一労働者」として扱われることである。また、「技能実習生」は最長で2年間の活動が認められている。つまり、同制度は1年間の「研修」と2年間の「労働」を合わせた3年間の日本滞在を可能にするものである。新規入国の研修生と日本に生活する技能実習生の総数は、既に留学生の数を上回ったと言われている。近年、新たに入国する研修生数は、前年比で30パーセント近い増加率(入国管理局2008)を維持しており、今後も更なる拡大が予測される。

3.2 外国人研修制度が定める日本語教育

同制度は研修生の日本入国後、なるべく早い時期に160時間の非実務研修の機会を設けることを定めている。非実務研修とは「交通ルール・安全衛生・日本の法律・生活様式」等、日本生活に必要な知識を得るための座学講習を意味しており、「日本語学習」はこの中の一部という位置づけである。つまり、日本語ゼロ初級の外国人が生産現場に入るにあたり、同制度は160時間の学習しか課していないのである。しかも、そこでは「日本語学習」以外のことも要求されており、言語習得の観点からは明らかに非現実的な規定であると思われる。

3.3 研修生への日本語教育の実態

入国後の「160時間」という規定のみでは、日本の生産現場で活動するには不十分であるが、実際に研修生の日本語教育現場の観察を試みた

中で、問題は現場で行われている日本語教育の実態にもあることが分かった。関東地区の受け入れ機関Aを訪問したところ、会社の事務員が付け焼刃の授業を展開していた。聞いたところ、そもそも日本語教育の知識や経験もなく何をすればよいのか分からないとのことで、全授業数の半分以上をビデオ鑑賞に充てていた。また、受け入れ機関Bでは会話を指導せず、フィリピンとベトナムの研修生にひたすら平仮名と片仮名を二週間にわたって黙々と書かせていた。受け入れ機関Cでは、日本語教育振興協会の認定を得ている日本語学校から講師を招き、日本語の授業を展開していた。訪問時、初級前半の項目は修了しているとのことであったが、既習内容での問いかけに応答できたのは19人のうち半数にも満たなかった。もちろん、カリキュラム作成から講師の確保にいたるまで、研修生活における日本語の重要性を十分に理解し尽力している受け入れ機関もあるが、先の機関AやBのようなケースも、同時に珍しくないことが現場訪問を繰り返す中で見えてきた。

3.4 学習者としての研修生の背景

研修生になるための資格条件に学習経歴の要求は無い。これは就学生のそれと大きく異なるところである。研修生は、18歳以上で技術習得の意志があれば、基本的には入国が可能となる。関東地区の研修生受け入れ機関Dでは、受け入れ研修生98人中、母国で高校（専門学校を含む）以上の教育機関を卒業しているのは5人であった。大方の研修生が中学校卒業と同時に就職し、技術者として長年働いていた経歴を持つ。先の98人の来日時平均年齢は25.4歳であり、義務教育を修了してから約10年が経過している場合が機関Dでは多いことが分かった。つまり、教室での学習活動を離れて久しいこと、また義務教育時に学習した英語が唯一の外国語学習経験であることが就学生との大きな違いであると言える。これらの学習者背景の相違が日本語学習に及ぼす影響は決して小さくない。実際に教室で教える日本語教師からは、両者の最大の相違点について次のような声が聞かれた。就学生を対象とした日本語学校から研修生受け入れ機関に出講している日本語教師A（経験5年）と日本語教師B（経験8年）に就学生と研修生の最も大きな相違点について聴き取りを行った。両氏によると、日本語教師Aは、最低限覚えてもらいたい単語・定型句等の暗記作業が困難であることをあげた。新出単語等がなかなか定着せず、運用練習が非常に狭い範囲に限定されてしまうとのことである。また、日本語教師Bは発音矯正の難しさを指摘した。教師B

は8年の教師経験の中で様々な国の就学生に指導してきているが、研修生への日本語指導にあたって、かつて経験したことの無い壁にぶつかっているとの印象を本人の話から受けた。教師A・教師Bは共通して、導入すべき単語や文型はより重要度が高いものに絞りなおす必要があることを述べた。また、学習者である研修生たちの話からは、授業時間以外の独自学習の習慣が比較的少ないこと、更には効果的な独自学習の方法が分からず困っている、という声も聞こえてきた。

4. 「共生言語」としての日本語

4.1 求められる日本人側の工夫

外国人研修生が日本語学習に割ける時間は、自ずと非常に限られたものとなる。本来の来日目的が産業技術の習得にあること、また現行の研修制度そのものが非現実的な発想のもとに規定されていることも要因となっている。ゼロ初級から日本語学習を始め、1ヶ月ほどで企業に配属されるケースがあることから、現場での意思疎通が困難であることは想像に容易い。しかしながらここでは、外国人研修生が増加している現実に焦点をあて、日本語社会において弱者になりがちなかれらの言語環境の改善に何ができるかということに目を向けたい。かれらとの共生社会を形成するためには、意思疎通の可能な共生言語が不可欠である。同じ土地に暮らしながら獲得できる情報量に格段の差があること、また両者の交流が困難である今日の状態は、改善が急がれるべき課題でもある。

4.2 研修指導員による対研修生発話の実例

研修事業に携わる日本語教師ではない日本人たちが、初級前半の日本語能力レベルにある外国人を相手にどのような発話を行っているか、研修現場の観察を試みた。受け入れ機関Dでは訪問時、研修生にそれぞれの配属企業名を確認していた。そこでは次のようなやり取りに遭遇した。

日本人職員：「Aさんの会社はどこ？」

研修生A：「・・・。」

日本人職員：「お勤め先はどちらですか？」

研修生A：「あ、え？」

日本人職員は自身の発話が理解されなかったため、先の言い替えを試みた。ところが、再び意図は伝わらず、効果的な共生日本語は産出されなかった。この様な調整は金属旋盤加工の現場からも観察された。下記は

研修生が理解できなかった研修指導員の調整である。

- ①「製品の出来栄えのばらつきは見過ごすことができないよ。」
- ②「決められたことは必ず守ること。」
- ③「異常を見つけたら必ず話すこと。」
- ④「分からないことを自分で判断しないこと。」
- ⑤「これお父さん，お母さん，大切OK？」
- ⑥「この刃物，心配，だめ，チェンジ安心。」
- ⑦「これ作る。倉庫，同じ物，来る。」
- ⑧「顔，洗う。目ぱっちり。」
- ⑨「あなた，私，言葉，的中OK？」
- ⑩「仕事，今日，良好，残りはなし。」

上記の中には日本人でも理解ができない表現が含まれている。中でも、「⑤」の発話は解説が必要ではないだろうか。発話者によると、「品物をやさしく丁寧に扱って欲しい」旨を表現したとのことである。同じく、「⑦」は「同じ物を作るための素材を倉庫から持ってきてください」，「⑧」は「仕事中にうとうとするな」，「⑨」は「私の言っていることが理解できますか」，「⑩」は「残業はできません」，の意味とのことである。

言語教育の現場に身をおかない人間にとっては，一般的に自らの母語に調整を加えて効果的な「共生言語」を創出することが容易ではない傾向があり，その一端が研修現場の観察に窺えた。

4.3 「分かってもらえる日本語」の提唱

岡崎敏雄(1994)が提唱する「日本語の国際化」や，岡崎眸(2001)の「共生日本語」はいずれもインターアクションを通して，日本人と外国人の両者が「互いが理解できる日本語」を創造していく方法をとるものであるが，そこでは最低限のやり取りに耐えうる日本語能力が不可欠となる。また，佐藤(1999b)(2006)は「やさしい日本語」を提唱し，それは日本社会においても拡充が急がれるべき有用なものであることを実証した。しかしながら，先の実験の被験者は大学の留学生(別科生も含む)を中心に構成されたものである。つまり，「やさしい日本語」は「ある程度の日本語能力」を有する外国人に対しては効果があると言えるが，日本語能力試験3級レベルの話者を想定して作られたものである以上，同レベルに到達しない話者が対象の場合においてはその運用は相応しいとは言えない。外国人研修生たちの多くが企業配属の時点で日本語能力試験

の4級レベルに到達しておらず、その日本語学習環境の改善は急がれるべき課題である。同時に、かれらに理解されやすい日本人の発話形態を追究し、外国人研修生に「分かってもらえる」日本語を早急に明示する必要がある。研修生自身の日本語学習と並行し、日本人も自らの発話に工夫を図り効果的な調整を実現することは、具体的な歩み寄りの一歩になるものと思われる。

5. 調査

5.1 調査

日常で言語教育に携わらない人々が、実際には外国人に向けてどのような発話を行っているのか、大学の別科生（17名）に協力を得て調査を実施した。手順は、接客窓口を設けて対応している大手の「家電量販店・宿泊施設・百貨店・旅行代理店」に協力者が電話をかけ、それぞれが実際に希望するタスクを自身の日本語能力のみで達成するというものである。調査依頼者はその過程を観察した。

5.2 調査結果

日本人と調査協力者の発話総数は「2180」であった（日本人発話総数：1108，調査協力者発話総数：1072）。「1発話」とは話者が代わるまでの継続した1人の発話行動のことである。よって、「話者A：ありがとう。」「話者B：どういたしまして。」という対話が観察された場合、発話総数は「2」となる。

先の日本人発話総数のうち、初不成立発話は「85」観察された。「初不成立発話」とは、両者の発話意図が双方に伝わる「成立」発話の繰り返しを対話の前提とした際、それが「不成立」に展開するきっかけとなった発話のことである。

5.3 日本人発話の実際と日本語教師発話の一例（「表：資料」）

「表：資料」中の「日本人発話」とは「初不成立発話」のことである。実際に日本人が用いた表現を文字化したもので、調査協力者に意図が理解されなかったものである。「発話意図」とは、日本人が伝えたかっと思われる内容を前後の文脈から判断したものである。また、会話の相手が非日本語母語話者である場合に、どのような形式であれば「発話意図」がより理解されるのかを、日本語教育現場に身をおく日本語教師C（経験10年）の視点から「日本語教師発話」として置き換え、「表：資料」

に 20 例記した。

5.4 「日本人発話」と「日本語教師発話」の相違

「表：資料」の「日本語教師発話」は現場教師による発話形態の一例である。「日本人発話」と比較した際、ネイティブの耳には不自然に響くかもしれないが、日本語初級話者にはより理解されやすい形態である。不自然な言語形態を肯定するか否かは、その考え方も様々ではあるが、かれらが研修に参加する産業現場では、日本人技術者が指示する作業内容を含め、「意図が通じる」ということが何よりも優先される課題である。

6. 研修現場での運用

6.1 研修現場 10 例（「4-2」）の「日本語教師発話」への言い替え例

研修指導員が実際に産出した「4-2」の 10 例を、来日間もない研修生を想定した「日本語教師発話」で言い替えると、次のような 4 級程度の表現で表せる。

- ①⇒「必ず同じ物を作ってください。もし、同じではありません。それはダメです。」
- ②⇒「ルール、規則はとても大事です、大切です。気をつけてください。」
- ③⇒「問題がある時、機械が悪い時、すぐ教えてください。」
- ④⇒「もし、問題がある時、もし分からない時、必ず聞いてください。話してください。」
- ⑤⇒「これは大切です。とても大事です。ゆっくりお願いします。きれいにお願いします。」
- ⑥⇒「これは古いです。もうダメです。使うことができません。新しいのを使ってください。」
- ⑦⇒「これを作ります。ですから、材料をください。材料は倉庫にあります。」
- ⑧⇒「寝てはいけません。今は仕事の時間です。起きてください。」
- ⑨⇒「分かりましたか？私の日本語が分かりますか？」
- ⑩⇒「今日は仕事が終わりました。もう仕事がありません。ですから、帰ってください。」

6.2 研修現場での実用化のための具体的な取り組み

現場の日本人職員、また研修指導員に効果的な調整発話を期待したい

ところではあるが、先の「日本語教師発話」は日本語教師としての経験から培われるものである。よって、研修現場の日本人に同発話を獲得してもらうには、調整発話を産出するための経験作業が不可欠である。研修場所となる日本の産業現場では、日本語能力が4級レベルに至らない外国人研修生が大方であるが、今後は、かれらが理解できる日本語を現場の研修指導員たちが獲得できるように、先ずはその形態を明示する必要がある。そして、この発話であれば外国人研修生にも理解されるという「分かってもらえる日本語」を研修指導員が獲得するための練習教材の開発が急がれるべきである。例えば、研修生の作業速度を早くさせたい時に、「急がなきゃ/急がないと/急がねえと/急がんと/急がな」などの発話形態よりも「急いでください/早くしてください」の方が意図が伝わりやすいと言える。また、「まだ換えんでいいよ/まだ交換せんでええ」の場合にはどのような発話がより効果的であろうか。日本人の研修指導員にはこのように練習教材に取り組んでもらい、「意図が通じる」という意味での「適切な調整発話形態を産出する訓練を促したい。

もっとも、日本語教育経験者であっても、研修が行われる産業現場の全てに即時対応することは容易ではない。研修現場では様々な専門的な語彙や日常では目の当たりにしない特殊な場面が頻繁に出現するからである。しかしながら、このような取り組みは、現場の一助となりうる可能性を多分に秘めていると思われる。

外国人研修生の日本語学習と並行し、日本人も「分かってもらえる日本語」を産出できるよう努めることは、双方の利益に結びつく取り組みと言える。

「表：資料」

発話意図	日本人発話	日本語教師発話
話題はデジタルカメラ。画素数の希望の有無を聞きたい。	特にカメラの画素数というのはご希望、ございますか？	どんなカメラが欲しいですか？写真が一番きれいなカメラですか？普通のカメラですか？
お客さんが住んでいる場所を聞きたい。	お客様、お住まいは日本ですね？	あなたはどこに住んでいますか？日本ですか？
話の展開から、店員は電話を浴衣売り場へ切り替えたい。	はい。それでは、浴衣の売り場におつなぎいたしますが。	はい。ちょっと待ってください。浴衣の店に電話を変えます。

発話意図	日本人発話	日本語教師発話
電話の代表受付が、どこの店舗に切り替えればよいか、お客さんに聞きたい。	どちらにおつなぎいたしましょうか？	あなたは、どこの店に電話をかけたいですか？
電話が売り場に繋がらない旨を伝えたい。また、店から電話をかけなおすことを提案したい。	申しわけございません。売り場が込んでるようでは出ません。折り返しご連絡しましょうか？	すみません。今、お店にお客さんがたくさんいます。ですから、電話ができません。後で、お店からあなたに電話をかけましょうか？
8階の店で浴衣を扱っている旨を伝えたい。また、電話を売り場に切り替えることを提案したい。	8階に、8階の和装小物の売り場にお取り扱いがございますので、よろしければおつなぎいたしましょうか？	それは、8階にあります。ですから、この電話を8階に変えましょうか？
お客さんの希望する浴衣が男性物か否かを確認したい。	えーと、男性の物でよろしいでしょうか？	それは男の人が使いますか？(着ますか？)
一番良く売れているカメラは、2万円後半であることを伝えたい。	そうですね、人気のある価格帯ですと、やはり2万円台後半ですね。	2万9千円ぐらいが一番多いです。買う人がたくさんいます。
素泊まりの場合の値段を伝えたい。	えーと、素泊まりで。	寝るだけです。ご飯がありません。
全て料理付きの宿泊で、素泊まりは出来ない旨を伝えたい。	一応、今のところはちょっとお料理つきでしか、の、でしかできてないんですけれども。	全部、料理があります。「寝るだけ」はダメです(できません)。
客の要求が「在庫の有無と値段の確認」であるか否かを確認したい。	在庫、お値段のお問い合わせでよろしいですか？	あなたは何が聞きたいですか？値段ですか？お店に今、「ある」か「ない」か、聞きたいですか？
僅かに2万円以下であることを伝えたい。	2万円切るぐらいですね。	2万円より少し安いです。
長時間待たせたことを詫び、そして売り場への内線が現在も繋がらない旨を伝えたい。さらに、店から電話をかけなおすことを提案したい。	お待たせしております。申しわけございません、内線がふさがっていて、確認がとれなかったのですが、売り場の者から電話をしてもよろしいでしょうか？	すみません。今、お店は電話をかけています。ですから、あなたは話すことが出来ません。あとで、お店があなたに電話をかけてもいいですか？
宿泊希望日を聞きたい。	お日にちは？	何月何日ですか？いつですか？

発話意図	日本人発話	日本語教師発話
具体的な宿泊日や人数によって値段が変わることを伝え、客が希望する月日を問いたい。	あ、お泊まりのお日にちとか、ご人数によっても変わってきますけれども。まず、お泊まりは、お日にちはいつがご希望ですか？	何月何日ですか？それから、何人ですか？値段(お金)は、同じではありません。
相手の発話が全く聞き取れなかったので、内容をもう一度確認したい。	はい？	なんですか？もう一度お願いします。
前出の内容は、所属する学校に自分で問い合わせれば分かるということ伝えたい。	はい、学校に聞いてもらえれば。	はい。それはあなたの学校に聞いてください。
素泊まりを希望しているのか否かを確認したい。	はい。お部屋代のみのご宿泊でいらっしゃるでしょうか？	はい。寝るだけの値段ですか？ホテルでご飯を食べませんか？
客が聞きたい値段は片道分だけであるか否かをかを確認したい。	片道分のお値段でよろしいですか？	行く時だけの値段(お金)ですか？
他の交通手段の有無を聞かれ、無い旨を伝えたい。	はい、ありません。	それは、ありません。

【参考文献】

- 大平未央子(2001)「フォリナー・トーク研究の現状と展望」『言語文化研究 27』p335-353
- 岡崎敏雄(1994)「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化—日本人と外国人の日本語—」『日本語学』12月号 明治書院 p60-63
- 岡崎眸(2001)「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」お茶の水女子大学多言語多文化共生研究室
<http://jsl3.li.ocha.ac.jp/okazaki/>(2008年11月28日最終確認)
- 御舘久里恵(2007)「外国人研修生の日本語習得と、受け入れ企業や地域との関わり」平成17年度～平成18年度科学研究費補助金[若手研究(B)](課題番号:17720124)研究成果報告書
- 坂本正 他(1989)「『日本語のフォリナー・トーク』に対する日本語学習者の反応」『日本語教育 69号』p121-146
- 佐藤和之(1999a)「やさしい日本語」弘前大学人文学部社会言語学研究室 HP <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/>(2008年11月28日最終確認)

佐藤和之(1999b)「「やさしい日本語」の有効性」弘前大学人文学部社会言語学研究室

HP<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ5yuukousei.htm>

(2008年11月28日最終確認)

佐藤和之(2006)「「やさしい日本語」の有効性検証のための『本実験解説書』」弘前大学人文学部社会言語学研究室

HP<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/kaisetsusyohtml/ka-i-mokuji.html>(2008年11月28日最終確認)

新庄あいみ・服部圭子・西口光一(2005)「共生日本語空間としての地域日本語教室一言語内共生を促進する新しい日本語活動とコーディネータの役割—」津田葵・真田信治(編)『言語の接触と混交—共生を生きる日本社会—』p57-86

西口光一 他(2007)「共生を育む地域日本語活動に向けて」『21世紀COE言語の接触と混交6』p59-97

西原鈴子(1999)「日本語非母語話者とのコミュニケーション—日本語教師の話はなぜ通じるのか—」『日本語学』6月号 明治書院 p62-69

ロンク・ダニエル(1992)「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォラー・トークを中心に—」『日本語学』12月号 明治書院 p24-32

依光正哲 他(2003)『国際化する日本の労働市場』東洋経済新報社

【参考資料】

国際研修協力機構(2007)「研修・実習に関する JITCO 業務統計」

入国管理局(2008)「平成19年末現在における外国人登録者統計について」<http://www.moj.go.jp/PRESS/080601-1.pdf> (2008年11月28日最終確認)

(杏林大学大学院博士課程)